

武漢大学留学報告書

福島県立医科大学医学部 4 年
学籍番号:151007 氏名:石井三千花

内容

1. はじめに.....	2
1-1. 留学の概要.....	2
1-2. 武漢市の概要.....	2
2. 武漢大学の基本情報.....	2
2-1. 概要.....	2
2-2. 学部・学科(学院) Faculty & School.....	3
2-3. 中国の医学部医学科のコースについて.....	4
3. 留学で学んだこと.....	4
3-1. 専門家との対話.....	5
3-2. School of Public Health での授業.....	6
3-3. 病院見学.....	7
3-4. 研究「統合失調症患者への態度の調査」.....	10
3-5. Friendship.....	11
4. まとめ.....	12
5. さいごに—謝辞—.....	12



1. はじめに

この度平成 30 年度福島県立医科大学国際交流事業の一貫で中国の湖北省、武漢市にある武漢大学に留学へ行きましたので留学先での様子や学び深めたことについて報告致します。

1-1. 留学の概要

- ・留学期間： 2018 年 4 月 9 日(月)~2018 年 5 月 18 日(金) 39 泊 40 日
- ・滞在場所： 武漢大学医学部キャンパス内「迎賓楼」
- ・配属先： 公衆衛生学院 school of public health
- ・武漢大学を選んだ理由： 武漢大学はアジアでも有名な大学であり、基礎研究が盛んなことで知られています。今回の留学を通して私は精神衛生に関する研究を実施することを望んでいました。武漢大学では自身の研究だけでなく、他の学生や先生の研究を見ることで良い触発を受けられると思い、武漢大学を選びました。また、中国は日本の隣国であり歴史的にも文化的にも多彩な繋がりがあります。今回の留学を通して中国を肌で感じることで字面や画像で知る中国ではなく自分の目で見て中国を知ることができることも大きな魅力であると思い、中国にある武漢大学を選びました。
- ・同行者(配属先)： 佐藤理香子(基礎医学院、病理学講座)
吉田 潤 (基礎医学院、病理学講座)
川俣 智洋 (基礎医学院、生理学講座)

1-2. 武漢市の概要

武漢市は湖北省の省都で、人口 821 万人、面積 8483 km²という大きな街です。(《参考》福島県:人口 188 万人、面積 13,780 km²、福島市:人口 29 万人、面積 768 km²) 長江と漢江が町の中心部で合流しており、この二つの河によって武昌、漢口、漢陽の三つに大きく分けられています。4 月と 5 月は季節の変わり目で、到着した頃は気温が 10℃後半のこともありました。帰る頃には 30℃を超える日も多く、水域面積が広い街なので湿度も高かったです。街にはバスや地下鉄、タクシーなどの交通が発達しているので近場の移動で不便に感じることは少ないと思います。また、歴史的建造物である黄鶴楼も武漢市内にあり大学所在地からバスで 30 分程です。更に三国志で有名な赤壁も比較的近くに存在し、武漢市から約 100 km ほどの場所にあるそうです。武漢市は歴史ある町ですが、現在では開発が盛んで、どこへ行っても地下鉄の工事を行っていました。

2. 武漢大学の基本情報

2-1. 概要

武漢大学は国家重点大学 National Key University であり、中国の教育省によって直接運営されている権威ある国立大学です。建築物は西洋と東洋が混在した様式であり世界で最も美しい大学とも言われています。1893 年に清後期の湖北省と湖南省の政治家である Zhang Zhidong によって創立された Ziqiang Institute が武漢大学の前身となっています。この教育機関の改革の過程で名称は幾度か変更されましたが、1928 年に現在の国立武漢大学 Wuhan

National University となりました。武漢大学は 100 年以上もの歴史のある大学で、その歴史を経る中で蓄積されてきたモットーは「自己成長 self-improvement、忍耐 prevalence、真理の追究 truth-seeking、革新 innovation」だそうです。卒業生の活躍も目覚ましく、30 万人もの有識者を輩出し、社会に貢献してきました。最近では国際交流や協力も優れていて、45 以上の国や地域の研究機関、415 以上の大学との交流があるそうです。(武漢大学 HP http://en.whu.edu.cn/About_WHU1/Overview.htm より)

2-2. 学部・学科(学院) Faculty & School

武漢大学には 6 つの学部があります(表 1)。各学部には 5~7 つの学科(学院*)が設けられており、文系理系を問わず幅広い分野の学問を網羅している学び舎です。*現地では学科の事を学院と称していました。医療科学部 Faculty of Medical Sciences の中に基礎医学科、公衆衛生学科、薬学科、看護学科、第一臨床学科、第二臨床学科、歯学科の 7 つの学科が存在します。研究学科もありますがこれは大学院生用の学科のようです。臨床医を養成する学科は第一臨床学科と第二臨床学科です。ただし、日本とは異なり一口に臨床医を目指す医学部と言っても様々なコースがあり、大学に入学する前にそれらの多くの選択肢の中からコースを必要があるそうです。

表 1. 武漢大学の学部と学科 武漢大学 HP<<http://en.whu.edu.cn/Schools1.htm>>より引用

	<p>Faculty of Humanities</p> <ul style="list-style-type: none"> • School of Philosophy • School of Chinese Classics • School of Chinese Language and Literature • School of Foreign Languages and Literature • School of Journalism and Communication • Department of Art • School of History 		<p>Faculty of Social Sciences</p> <ul style="list-style-type: none"> • Economics and Management School • School of Law • School of Marxism • School of Political Science and Public Administration • Department of Sociology • School of Information Management • School of International Education
	<p>Faculty of Sciences</p> <ul style="list-style-type: none"> • School of Mathematics and Statistics • School of Physics and Technology • School of Chemistry and Molecular Sciences • School of Life Sciences • School of Resources and Environmental Sciences 		<p>Faculty of Engineering</p> <ul style="list-style-type: none"> • School of Power and Mechanical Engineering • School of Electrical Engineering • School of Urban Design • School of Civil Engineering • School of Water Resources and Hydroelectric Engineering
	<p>Faculty of Information Sciences</p> <ul style="list-style-type: none"> • School of Electronic Information • School of Computer Science • International School of Software • School of Remote Sensing and Information Engineering • School of Geodesy and Geomatics • School of Printing and Packaging 		<p>Faculty of Medical Sciences</p> <ul style="list-style-type: none"> • School of Basic Medical Science • School of Public Health • School of Pharmaceutical Sciences • School of Nursing • First School of Clinical Medicine (Renmin Hospital of Wuhan University) • Second School of Clinical Medicine (Zhongnan Hospital of Wuhan University) • School of Stomatology (Hospital of Stomatology, Wuhan University) • Medical Research Institute

2-3. 中国の医学部医学科のコースについて

医療科学部のうち臨床学科と呼ばれているものが日本でいう医学部医学科に相当します。第一臨床学科と第二臨床学科とでは病院が異なっていて、前者は人民病院に、後者は中南病院にあります(武漢大学の附属病院については後述→[3-3-1. 武漢大学の附属病院について](#))。これらの臨床医を目指す学科は5年コース、5+3年コース、8年コースの3つのコースが存在します。入試の成績に応じてどのコースに入れるかということが決まるそうです。これらのコースの大きな違いは卒業時点で取得できる学位にあります。順に、学士、修士、博士の課程がそれぞれ取得できます。卒業時に取得できる学位を見ると5+3年コースが最も日本の医学部のスタイルに似ていると言えます。また、どのコースに在籍していても5年生を終えれば中国の医師国家試験を受験することができるそうです。しかし、5年コースでは学士までしか取得できず、大学病院のような大きな病院に勤めることは困難であり、その後大学院に進学し更に3年かけて修士を取得する学生や、あるいは5年かけて博士を取得する学生もいます。5+3年コースでは修士までしか得られないため、卒後更に3年かけて博士を取得する学生が多いそうです。中国では就職先となる病院が学位によって大きく左右されるため、学生は必至になって学位の取得に励むようです。以前は5+3年コースではなく7年コースというものが存在していたようですが、今は無く、また現れるのではないかという声も上がっているそうです。5+3年コースが最も人気であり、8年コースは在学中に臨床医になるための講義、病棟実習、研究のすべてを終了しなければならずとても厳しいコースであるということを8年コースに在籍する学生から聞きました。中国の医学部医学科のコースは頻繁に変わるらしく、数年後には全く異なるコースができていられるかもしれません。

3. 留学で学んだこと

武漢大学では留学期間中に、公衆衛生学院で栄養学を専門としている Qiqiang He 教授の研究室に配属してもらいデスクも用意して頂きました。私が研究したい分野は精神衛生についてでしたので専門分野が異なるのですが、研究室に配属することで修士を取得中の学生や、大学院生とも話すことができ良かったと思います。又、臨床医学院や基礎医学院ではなく公衆衛生学院に所属することで医師以外の多種多様な職種の方と対話する機会も沢山いただきました。

留学期間の約6週間は主に研究準備に時間を割いていました。その間に、病院見学や授業への参加など、次のカレンダーに示すように様々な経験を積むことができました。主に、専門家との対話、公衆衛生学院の授業への参加、病院見学、研究の4つが留学中に取り組んできたことです。放課後や休日は武漢大学生や他の大学生との交流の機会が多く、沢山の友達ができただけでなくこの留学で学び得られたことであると思います。ここからはこの短期留学を通して学んだことを「専門家との対話」「School of Public Health での授業」「病院見学」「研究」「Friendship」の5項目に分けて記載します。

4月,5月(2018年) 留学中のスケジュール

日	月	火	水	木	金	土
4/8	9 出国	10 入学手続き, 教授顔合わせ	11	12 専門対話(*) 生理学実習	13 論文抄読会 病理学授業	14
15 黄鶴楼へ	16 病理カンファ PH授業(**)	17 専門対話 PH授業	18 PH授業	19 病理授業 基礎研究発表会(病理)	20 PH授業	21 脳外学会 日本語スピーチ コンテスト
22	23 PH授業 神経内科授業	24	25	26 病院見学 病理授業	27 論文抄読会	28
29	30	5/1 労働節	2	3	4 病院見学 公衆衛生実習	5
6	7 病院見学	8 病院見学	9 病院見学	10 病院見学	11 論文抄読会	12
13	14 病院見学	15	16	17	18 帰国	19

何も予定が記載されていない日の平日は基本的には研究室にいました。病理学や生理学の授業や実習は他の福島医大の留学生3名がそれぞれ配属されていた講座であったため参加することができました。《略語》(*)専門対話: 専門家との対話, (**)PH授業: Public Health(公衆衛生)の授業。赤字は連休。

3-1. 専門家との対話

武漢大学に到着した日の翌日、各配属先の講座の先生方と顔合わせをする機会がありました。その時に、School of Public Healthの担当としていらした方がFeng教授でした。彼女は教育学を専攻していてかつて英語を教えていたそうです。どなたと話したいかを武漢大学School of Public Healthのホームページから自分で選んで彼女に伝えればその方とつなげてくれるということになり、2名の方との対話の機会を頂くことができました。

最初は4月12日にXiaoqin Wang先生と話しました。彼女はSchool of Nursingの講師で、統合失調症の患者が主観的に感じる差別についての研究をなさっている方でした。これに関して2016年に論文を2つ出されていたので拝読しました。聞いたところによると、やはり統合失調症の患者は退院後の生活になじめず苦しんでいる人が武漢にも多いようです。そこで、アメリカの事業を参考に、病院から退院して自宅に帰る前に、患者が生活する施設をつくるということに取り組んでいるようでした。しかし、依然としてこの施設は

不足しているようで今後の改善策として政府が動いてくれるように根拠を積み上げて行政に働きかけていく、ということもおっしゃっていました。また、看護学生による Home Visit という働きかけも行っているようでした。これは、うつ病などの精神疾患を抱えている患者に対して積極的に関わりを持つというプロジェクトです。授業としてではなく、興味のある学生を募って取り組んでいるようでした。うつ病等に罹患すると、引きこもってしまうことも多く、同居している家族とすらも関わりを断ってしまうことがあります。そのような患者に対して病院に来てもらって治療を呼び掛けることはほとんど困難です。そこで、Home visit を通してそのような患者の訴えに積極的に耳を傾けていくことに力を注いでいるようでした。

4月17日には Yuxiao Zhang 先生と話すことができました。彼女は一度 School of philosophy を卒業してから、現在の School of public health にて勤務されていました。主な仕事内容は、地方自治体の政策を監視することだとおっしゃっていました。政策は省によって異なるそうです。また、現在の保険制度についても説明してくれました。湖北省では医療費の患者の自己負担分は 25% であり、残り 75% は政府が負担すると言っていました。最近では 2013 年から福建省でモデル事業として行われている保険制度の改革があるとも教えてくれました。現在の制度では、病院と保険会社は独立しています。この制度では病院が患者に医療を高額で提供することで、病院の利益を上げようと企む場合があり、患者は十分な治療を受けるために多額の医療費を負担することとなります。これを防ぐために、患者に提供するための医療資源を買う機関とその料金を支払う機関を分けるのではなく、同一にしようという制度が、新しい保険制度の仕組みだそうです。モデル事業が開始され 5 年経過しているので、この制度を福建省だけではなく、他の地域にも導入しようとする動きが見られているとおっしゃっていました。

3-2. School of Public Health での授業

公衆衛生学部 4 年生の授業には主に滞在 2 週目に出席しました。時間割は次の通りでした。毎日午前と午後の一つの科目について講義があり、それぞれ 2 回ほどの休憩をはさんで行っていました。

	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
9:50-12:15	Professional English	Labor sanitation and environmental hygiene (Lab practice)	Occupational health and occupational medicine	Environmental health	Nutrition and food hygiene
12:15-14:00	Lunch time				
14:00-16:30	Occupational health and occupational medicine	Environmental health	Nutrition and food hygiene	Labor sanitation and environmental hygiene (Lab practice)	Comprehensive practice of nutrition and food hygiene

私が参加したのは professional English, occupational health and medicine, environmental health の 3

種類でした。グレーで塗りつぶしてある授業には研究準備の都合上参加できませんでした。

月曜日の **Professional English** のみ英語の授業で、他の授業はすべて中国語で行われていました。英語の授業は外国語の英語教師が担当していました。私が参加した授業では **Oral presentation** を効果的に行うにはどうすれば良いかという内容で、次回の授業では学生が与えられたテーマに沿ってパワーポイントを作成しプレゼンを行うというものでした。発表内容はとても学問的で、ある一つの論文を、**introduction, method, result, discussion** の流れで紹介するというものでした。この授業を担当していた先生によると **discussion** は発表者からは言及せず、質疑応答を通して、発表者と聴衆と皆で議論していくという方法もあるということも学びました。また、学生の評価は学生が行なうというピア評価でした。日本でもこの方式は採用されることは多くありますが、各学生への結果は個人あてに伝えられ、自分以外は誰も見ることはできないようになっていきます。しかし、驚いたことに今回参加した授業では、その場において、挙手性でしかも評価される学生の目の前でピア評価がなされていました。これはかなり衝撃的でした。

Occupational Health and Medicine や **Environmental Health** などの中国語で行われていた公衆衛生学部 4 年生の授業では病気に関する知識はそれほど深く学ばず、主に法律や研究方法に関する内容が多かった印象を受けました。公衆衛生学を専攻している学生は、将来は行政に勤務することや研究者になるということを望む学生がほとんどであり、授業もそれらを見越して講義を行っていました。

5/4(金)の午後には、公衆衛生学実習として、大学に隣接している幼稚園に行き、身体測定を学生が行なっている様子を見学しました。皮膚の厚みを測って皮下脂肪を測定する器具は初めて見ました。この他に、身長、体重、頭囲、腹囲などを順に学生が測定していました。どの学生も慣れたもので小さい子供へ話しかけて遊ぶなどして、とても楽しそうに活動していました。

3-3. 病院見学

私たちはまだ医学部 4 年生の前期ですので、日本での病棟実習は始まっていません。今年の 10 月から始まる予定です。日本の病棟について知る前に中国の病院の様子も知りたいと思い、見学させてもらいました。

3-3-1. 武漢大学の附属病院について

武漢大学には附属病院が 2 つあります。中南病院と人民病院です。これらの病院は武漢市内で TOP 3 位と 4 位の大学に相当します。他に口腔医院と校医院の 2 つの病院がキャンパス内にあるそうですが、規模はそれほど大きくありません。武漢大学の医学部キャンパス内にあるのは中南病院で、宿泊場所から歩いて 5 分ほどの場所にありました。一方、人民病院はキャンパスからは遠く離れています。最近では人民病院の姉妹校として新しい病院が建設されました。その名称は武漢大学人民病院東院です。昔からある人民病院は医学部キャン

バスから地下鉄を利用して片道約 1 時間、新しい方の東院までは更に遠く、医学部キャンパスからバスを乗り継いで片道約 2 時間でした。昔からある人民病院から新しくできた東院までは毎日 1 本の往復バスが運行されているそうです。

私たちはキャンパスから近い中南病院だけでなく人民病院にも行くことができたので、どの診療科を見学してきたかを病院ごとにお伝えします。



写真(左)は中南病院の外観。第二臨床学院の学生が所属する。医学部キャンパスに隣接している。
写真(中央)は人民病院の外観。第一臨床学院の学生が所属する。
写真(右)は人民病院東院の外観。

3-3-2. 中南病院 Zhongnan hospital

・総合内科: 血液内科、呼吸器内科、神経内科、消化器内科

血液内科の Chen 先生が病院を案内してくれました。初めに、朝 8 時頃に血液内科の Doctor's Office へ行き朝のミーティングに参加しました。その後、武漢大学の学生とも一緒に入院患者のカルテを事前に確認した後、先生の回診について回り入院患者の様子を見させてもらいました。続いて、入院フロアに併設されている検査室を見学しました。骨髄の標本や遠心分離機などの検査の機材が 1 つのフロアに凝集していて、血液内科専用の検査室となっていました。その後、幹細胞移植室を見学しました。入院部屋は 6 床用意されていました。

呼吸器内科では Wang 先生という女性の医師が私たち学生を案内してくれました。実際に聴診のことも教えてくれ、胸水が貯留している患者の呼吸音の左右差も学ぶことができました。呼吸器内科では気管支鏡の検査の様子も見ることができました。

神経内科と消化器内科は午後に訪問したため、ほとんど見ることはできませんでした。神経内科では Intensive care unit(ICU)を見学しました。消化器内科では、潰瘍性大腸炎やクローン病の疾患を主に取り扱っていることが分かりました。

・脳外科

脳外科は合計 2 回も訪問することができました。1 回目は、昨年福島医大に交換留学生として脳外科で学んでいた Zou さんという方が、脳外科の先生とつないでくれました。病院見学の前の週には脳外科学会が大学近隣で開催されていたのでそれにも参加しましたが、その時にお会いした脳外科の先生方とも再び会うことができました。また、この脳外学会で

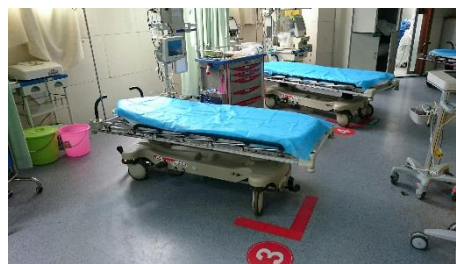
は東北大学の脳外科医の藤村先生がもやもや病について発表されていました。中南病院の脳外科の入院患者病棟も見学しましたが、藤村先生がおっしゃっていたようにもやもや病の患者が多かったです。また、病棟見学では手術室の中も見せてくれました。私が見た手術室では新しい医療器具の導入を試みている場面でした。そこではオペの最中に造影検査ができるというハイブリット手術室を導入しているようでした。その際、動脈瘤の手術方法であるクリッピングとコイルの2つについて丁寧に説明してくれました。2回目は、事務の方を通して訪問することができました。朝のミーティングでは、症例報告だけでなく論文のメタ解析の発表もあり、非常に興味深かったです。メタ解析の内容は、もやもや病の治療として血管吻合があるのですが、その具体的な方法について比較していました。

・産婦人科

産婦人科では朝 7:30 頃に入院病棟へ訪問したのですが、朝早いにも関わらず病棟内は患者やその家族で埋め尽くされていました。病室だけではベッドが足りず、廊下にも患者のベッドが沢山並べてありました。この状況は産婦人科に限ったことではありませんが、特に産婦人科では多くの病床が廊下に並べてあり、廊下には人が歩いてぎりぎり通れるくらいのスペースしか余っていませんでした。Chou 先生という女医が私たちを案内してくれましたが、あまりの忙しさに睡眠を 3 時間ほどしかとっていないと言っていました。回診後は、産婦人科の手術室に行くことができました。中南病院の産婦人科では腹腔鏡を用いた手術が有名だそうで、それも実際に見させてもらいました。

・救急科

救急科は中南病院のバス停のすぐそばにある建物でした。訪問したときは朝 8:30 頃で、この時間帯は既に外来病棟が始まっていたためあまり混雑はしていませんでした。救急搬送室には数名の患者が来ていました。この部屋には 4 床のベッドがあり、それぞれのベッドを配置する床には番号が 1 から 4 まで振られていて、重症度や治療の優先順位に応じて患者のベッドを移動していました。どの患者も基本的には心電図を初期に装着していて、昨年前期に学んだ循環器内科の内容が役立つように思います。



救急搬送室のベッド

3-3-3. 人民病院 Renmin hospital

・心臓内科

人民病院で最も有名な診療科は心臓内科であるということで訪問が決まりました。特にカテーテル治療で有名となっているようでした。CCU という心臓内科の ICU という部屋も見学しました。ここでは初めて IABP(intra-aortic balloon pumping)という器具を見ることができました。写真でしか見たことが無かったので実物を見ることができ良かったです。また、心臓内科では京都大学に留学していたという中国の医師にも会いました。彼が言うに

は、PCI(percutaneous coronary intervention)というカテーテル治療の数は年間 2000 件以上が人民病院で行われており、これは日本よりも圧倒的に多いと言っていました。

・精神科(人民病院東院)

精神科は中南病院にはありません。しかし、以下の二つの理由で人民病院の精神科見学が決まりました。一つには、私自身が心理学に最近興味を持ち始めていたということです。日本に限らず社会問題となっている自殺を防ぐにはどうすれば良いのか。これについて探求したいと思い精神科訪問がその一助となるのではないかと考えました。二つ目には、私の研究のテーマは精神疾患に関するものであったということです(詳細は後述→3-4. 研究「統合失調症患者への態度の調査—福島県立医科大学と武漢大学の比較研究—」)。以上の理由から精神科への訪問が決まりました。

朝 8:00 からミーティングが始まり、新規患者や入院患者で様子が変わった方についての情報を共有していました。その後、精神科の Wang 教授という女性の医師の回診について回りました。この先生はあまり投薬をせずに患者と沢山話す機会を大切にするとっていました。回診の後では、病棟の見学をし、開放病棟だけでなく閉鎖病棟も少し見させて頂きました。お昼休憩では Wang 先生という男性の精神科医ともお話し、研究依頼をしてきました。また、精神科には日本語を話せる研修医の Jack さんという方がおり、中国語での医師患者間でのやり取りをほとんどすべて日本語に翻訳してくれ、内容を理解することができ非常に勉強になりました。

3-4. 研究「統合失調症患者への態度の調査—福島県立医科大学と武漢大学の比較研究—」

私は MD-PhD コースとして福島県立医科大学では疫学講座に在籍しています。この講座の先輩が約 2 年前に「福島県立医科大学における統合失調症患者への態度の調査」という横断研究を行っていました。そこで、この交換留学の機会を活かして武漢大学でも同様の調査を行ってみることに決めました。これはアンケートを用いた無記名調査です。He 教授の講座に所属する大学院生の Mario さんという方がオンラインでのアンケート作成の方法を教えてくれ、問卷 wenjuan.com という Web 上のサービスを使わせて頂きました。また、中国語への翻訳は昨年福島に交換留学生として来ていた Tammy さんが自ら協力してくれました。そのおかげで英語版と中国語版の両方で調査を実施することができました。両方合わせた回答者は 289 名、うち臨床系の医学生は 135 名でした。解析は現在行っています。またこの調査は人民病院東院の精神科の先生にも協力を依頼する予定です。

この調査に関連して、論文抄読会では学生の発表を聞くだけでなく、私も Community-based comprehensive intervention for people with schizophrenia in Guangzhou, China: Effects on clinical symptoms, social functioning, internalized stigma and discrimination(中国広東省広州市において統合失調症患者に、地域に根差した包括的な介入をした場合、臨床症状や社会機能、内面化された汚名、差別のそれぞれについてどの程度影響があるか)という中国とイギリスの学者による論文を紹介しました。この論文抄読会は

2週間に一度、金曜日の昼休みに行われており、私のように他者の論文を紹介する場合もあれば、学生によっては自分自身の研究を発表している人もいました。He教授が栄養学を専門としているということもあり、「果物と野菜の摂取量と高血圧の関係」「果物・野菜の摂取量と体重・BMIとの関係」という内容で研究し、既に論文を発表したという学生もいました。中にはスマートフォン依存と睡眠の質の関係について調査している学生もいました。聴衆は学生がほとんどでしたがその中に大学院生も多くいました。また、He教授もこの抄読会に参加して学生に様々なアドバイスをしていました。

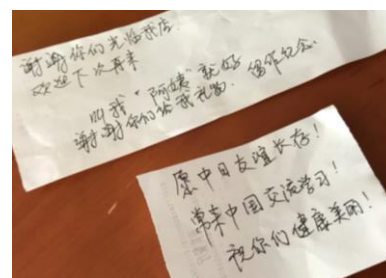


論文抄読会の様子

3-5. Friendship

留学期間中は、初日から最終日に至るまで本当に数多くの友人に助けられました。昨年交換留学生として福島医大に来た Tammy さん、Wang Lu さん、Zou さん、Deng さんとも再び会うことができました。また、日本の文化に興味があり日本語を勉強している学生とも会うことができ、夕飯に行くなどして沢山関わりを持つことができました。さらに、私はバスケットボールを趣味で行っているのもその運動用具を日本から持参し武漢大学のサークルに混ぜてもらうことも出来ました。大学内には沢山のバスケットボールコートが屋外に設置されていてとてもメジャーなスポーツであり、バスケットボールを日常的に行っている学生も多くいました。スポーツでの繋がりを通して沢山の学生と触れ合うことも出来ました。また、武漢大学には留学生が多く、医学部キャンパスにも多くの留学生がいてご飯に誘ってくれたり、手続きのサポートをしてくれたりしました。特にタイ出身の Mint さんとそのルームメイトでスコットランド出身の Stephanie さん、そしてインド出身の Ekansh さんには本当にお世話になりました。現地の学生は皆、忙しいにも関わらず夕飯を一緒に食べたり、観光に連れて行ってくれたり、多くの楽しい時間を共有できてとても有意義でした。どの学生も非常に協力的で初めて会った人であっても親しく話しかけてくれるような人が積極的に私たちと交流してくれたと思います。

Friendship という表現が適切かは分かりませんが、学生食堂のおばちゃんとも親しくなれました。初対面の頃は、私が中国語を分からないせいで怒らせてしまいましたが、佐藤さんと一緒に通い詰める中で徐々に仲良くなり、注文の度に中国語を教えてくれるようになり、帰国前日にはレシートの裏に手紙を書いてくれるまでになりました。ずっと大切にします。



食堂のおばちゃんからもらったメッセージ

4. まとめ

この留学を通して、日本と中国の違いや共通点について、医療の面だけでなく日常的に感じることができました。授業では学生が普通に学術論文を読みこなしている姿が印象的でした。また、中国では就職に当たって学位の存在が日本よりも重視されている印象を受けました。病棟見学では患者の数から人口の多さを実感し、医師はとにかく多忙であり患者から常に何かしら相談されている姿がとても印象的でした。また、生活の面では日本が衛生面で優れているというのがありますが、慣れるまでは少し大変だったように思います。逆に共通点については、人と関わる中でよく感じました。言語の違いはありますが、性格や勉学への情熱など、中国だから上回っているというのではなく、日本と同様、ほとんどそれは人によるものだと感じました。

日中間の相違点や共通点だけではなく、何よりも最も痛感したことは人脈の大切さです。留学前は現地の友人や知り合いは数えるほどでしたが、多様な繋がりを通して中国だけでなく他の国の友人を沢山つくることができました。医療者として働くにあたって人脈が大切となるということは常々聞きますが、それだけではなく自分自身の世界観を広げるという意味においても重要となると思います。今回の留学で出会えた人々との繋がりを絶やす事なく今後も大切にしていきます。

5. さいごに—謝辞—

本年は日中平和友好条約締結 40 周年という意義深い年です。このような佳節を迎えた年に中国を訪れたことの意味は計り知れず、今回の留学で得られた貴重な繋がりを今後も大切にしていきたいです。武漢大学でお世話になった公衆衛生学院の Feng 教授、He 教授や同学部の学生、武漢からの交換留学生として昨年福島医大に来ていた 4 名の学生をはじめとする現地の学生、武漢大学医学部に在籍する留学生、現地で出会ったすべての方々、福島県立医科大学で留学の手続きを進めてくださった國分さん、交換留学責任者の和栗教授、研究をサポートしてくださっている大平教授、留学を応援してくれた家族や全ての友人、そして 6 週間を共にした 3 名の学友たちにこの場をお借りして御礼申し上げます。誠にありがとうございました。